

【2015年 聖書講筵レジュメ (配付資料等)】

2015年

2015年1月 「福音の原点」 (キリスト道講演会) 聖書引用箇所

2015年1月18日 (東京新宿)

2015年5月 「福音伝道における各キリスト召団の使命と各人の課題」 福音特別セミナー

資料

2015年5月30～31日 (御殿場YMCA東山荘)

2015年5月 福音特別セミナー 講筵メモ

2015年5月30～31日 (御殿場YMCA東山荘)

2015年7月 詩篇および新約聖書と「祈り」 (キリスト道講演会)

2015年7月12日 (東京新宿)

2015年7月 夏季福音特別集会 (京都) のご案内

2015年7月5日 (京都)

2015年10月 「見えるもの」と「見えないもの」 (キリスト道講演会)

——真に永続するものを求めて——

2015年10月25日

2015年11月 「まず神の国と神の義を」 (マタイ福音書より)

2015年11月8日 (京都)



聖書引用箇所

2015年1月 「福音の原点」(キリスト道講演会)

2015年1月18日(東京新宿)

● I 人の側

詩篇130篇 深き淵より

詩篇143篇 1〜2、4、6、7〜11節、同62篇、63篇 1〜8節、同42篇 1〜2節、5節

ルカ伝福音書18章 9〜14節

● II 神の側

イザヤ書55章 1〜3 (前半)、6〜13節

マタイ伝福音書9章 9〜13節

ルカ伝福音書15章 11〜32節

ヨハネ伝福音書3章 16〜21節

テモテ前書1章 12〜17節、2章 4〜6節

● III 新しい生命に生きる

ヨハネ伝福音書3章 3〜8節

コリント前書1章 18〜31節

コロサイ書3章 1〜4節、12〜17節

ピリピ書4章 4〜7節



2015年4月「福音の原点」(キリスト道講演会)

——「愛」に根差して生きる——

2015年4月5日(京都)

● 一人間の現実、昔も今も、洋の東西を問わず、変わらない。

「24人は皆、草のようである。その栄はすべての草花のようである。草は枯れ、花は散る。しかし、主のことは、とこしえに変わることはない。」(ペテロ第

一1・24フランシスコ会聖書)(旧約聖書・イザヤ書40・6〜8、同・詩篇103・14〜16)

「9……われらの年の尽きるのは、ひと息のようです。10われらの^{よわ}齢は70年にすぎません。あるいは健やかであっても80年でしよう。しかしその一生はただ、骨折りと悩みであって、その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです。」(詩篇90・9〜10 口語訳聖書)

旧約聖書・伝道の書(口語訳聖書)から

「2伝道者は言う、空の空、一切は空である。3日の下で人が労するすべての労苦は、その身に何の益があるか(伝道1・2〜3)

「23そのすべての日はただ憂いのみであって、その業は苦しく、その心は夜の間も休まることがない。これもまた空である(伝道2・23)

「12働く者は食ることが少なくても多くても、快く眠る。しかし飽き足りるほどの富は、彼に眠ることを許さない。……13……富はこれを蓄えるその持ち主に害を及ぼす。14またその富は不幸な出来事によって失せて行く。その人が子をもうけても、彼の手には何も残らない。15彼は母の胎から出てきたように、すなわち裸で出てきたように帰って行く。彼はその労苦によって得た何物をもその手に携え行くことができない。16人は全くその来たように、また去って行かなければならない。……17人は一生、暗闇と悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある(伝道5・12〜17)。

(参考：新約聖書・テモテ第一書6章6〜8「6信心があつて足ることを知るのは、大きな利得である。7わたしたちは、何一つ持たないでこの世に来た。また、何一つ持たないでこの世を去って行く。8ただ衣食があれば、それで足りるとすべきである」)

「9日の下で神から賜わったあなたの空なる命の間、あなたはその愛する妻と共に楽しく暮らすがよい。これはあなたが世にあって受ける分、あなたが日の下で労する労苦によって得るものだからである。10すべて、あなたの手のなし得ることは、力を尽くしてなせ。あなたの行く^{よみ}陰府には、わざも、



計略も、知識も、知恵もないからである。

11わたしは日の下を見たが、必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つのではない。また、賢い者がパンを得るのでもなく、さつき者が富を得るのでもない。また知識ある者が恵みを得るのでもない。しかし時と災難はすべての人に臨む。12人はその時を知らない。魚が災いの網にかかり、鳥が罫にかかるように、人の子らも災いの時が突然彼らに臨む時、それにかかるのである。」(伝道9:9〜12)

● II 地上の世界(精神の世界も含めて)は有限であり、永遠なるものではない。

我らの生命もまた、有限である。死をもつて、すべてが終るとすれば、「伝道の書」の嘆きのごとく、まことに儂いものである。我々は、自身の中から「永遠の生命」(地上の生命を越えて永遠に生き続ける命)を創り出すことはできない。それでいて、我々の内なる(隠れた)願い(欲求)は「永遠なるもの」「地上の生命の終焉とともに終わることのないもの」を求めている。人は、それを遺族や彼を慕う人々の「追憶」の中に生き続けると言い、心の中に生き続けるのだと言う。でも、亡くなった人は、どうなのか。完全に「無」なのか。その人は、「自分の生命は、命は、終わるけれど、残された人の追憶の中に、心の中に残るから、それでよい」として、老後を明るく、生き生きと生きられるのか。完全に「ゼロ」「無」なら、慰霊祭を行ったり、黙祷を捧げたりすることは、偽りではないか。「伝道の書」には、

「10わたしは、神が人の子らに与えて、骨折らせられる仕事を見た。11神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた、人の心に永遠を思う^{おもい}思念を授けられた。それでもなお、人は、神のなされる業を初めから終りまで見極めることはできない。」(伝道3:10〜11)

とある。もしも、「永遠の命」(この地上の生命の終りをもつて終わらない命)があるとするれば、そして、それは人間が自ら創り出すことができない以上は、神が与えて下さるほかはない。では、神は、与えて下さるのか。どうして、それを知ることができるのか。

● III 神の側からの呼びかけイザヤ書55章

「1さあ、渴いている者は皆、水に來たれ。金のない者も來たれ。あなたがたは、來て、金を出さずに、ただで葡萄酒と乳とを買い求めよ。2なぜ、あなたがたは、糧にもならぬもののために金を費やし、飽きることもできぬもののために労するのか。わたしに、よく聴き従え。そうすれば、良い物を食べる³ことができる。3耳を傾け、わたしに來て聴け。そうすれば、あなたがたは生きることができ⁴る。4近く……6あなたがたは主にお会いすることができるうちに、主を尋ねよ。近く



おられるうちに呼び求めよ。⁷ 悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨て、主に帰れ。そうすれば、主は彼に憐れみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かに赦しを与えられる。⁸ わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。⁹ 天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」(イザヤ55・1〜9)

また、詩篇103篇は、次のように神の救いの御業を高らかに讃えている。

「わが魂よ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なる御名をほめよ。

² わが魂よ、主をほめよ。そのすべての恵みを心にとめよ。

³ 主は、あなたのすべての不義を赦し、あなたのすべての病を癒し、

⁴ あなたの命を墓から贖い出し、慈しみと憐れみとを、あなたに被らせ、

⁵ あなたの生きながらえる限り、良き物をもって、あなたを飽き足らせられる。

こうして、あなたは若返って、鷲のように新たになる。……

⁸ 主は、憐れみに富み、恵み深く、怒ること遅く、慈しみ豊かでいらせられる。

⁹ 主は、常に責めることをせず、また、とこしえに怒りを抱かれない。

¹⁰ 主は、われらの罪にしたがって我らをあしらわれず、われらの不義にしたがって報いられない。

¹¹ 天が地よりも高いように、主が己を畏れる者に賜わる慈しみは大きい。

¹² 東が西から遠いように、主は我らの咎を我らから遠ざけられる。

¹³ 父がその子を憐れむように、主は己を畏れる者を憐れまれる。

¹⁴ 主は、われらの造られた様を知り、我らの塵であることを覚えていられるからである。

¹⁵ 人は、その齢は草のごとく、その栄は野の花にひとしい。

¹⁶ 風がその上を過ぎると、失せて跡なく、その場所に聞いても、もはやそれを知らない。

¹⁷ しかし、主の慈しみは、とこしえからとこしえまで、主を畏れる者の上にある、その義は、子らの子に及び、

¹⁸ その契約を守り、その命令を心にとめて行う者にまで及ぶ。(詩篇103・1〜18)

● IV 新約の世界——キリストの福音

旧約における人間の側の嘆き、悲しみ、儂さ、罪とがの責め、苦しみ、呻き、その中での「永遠の生命」「永遠なるもの」への願い、これらの全てを一身に背負って現れたのが、ナザレ



のイエスという人だった。この人は、自らを「神から遣わされた者」と自覚していた。神に、「父よ」と呼びかけ、絶えず父なる神の懐の中に祈り入っていた。天地万物の創造される前から、天界において神と共にあったとの自覚をもっていた。

そして、この方にとつて最も大切なことは、父なる神の御思いに応えること、父の御心(御意)に従うことであった。次のように言っておられる。

「³⁸わたしが天から下つて来たのは、自分の心のままを行うためではなく、わたしを遣わされた方の御心(御意)を行うためである。³⁹わたしを遣わされた方の御心(御意)は、わたしに与えて下さった者を、わたしが一人も失わずに、終わりの日に甦らせることである。⁴⁰わたしの父の御心(御意)は、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終わりの日に甦らせるであろう。」(ヨハネ6・38〜40)

私たちは、生まれながらの人間(それを聖書では、「肉」と表現している。)のままでは、「永遠の命」を持つていないし、天の次元(永遠の世界)とは無縁である。それは、神ご自身から賜わるほかはない。どうすれば、永遠の世界に入れるのか。ユダヤ人の指導者ニコデモとの対話の中で、イエスは次のように言っておられる。

「³……よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。……⁵……だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国に入ることはできない。⁶肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。⁷あなたがたは新しく生れなければならぬと、わたしが言ったからとて、不思議に思うに及ばない。⁸風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである。」(ヨハネ3・3〜8)

このように語ったあと、

「¹³天から下つてきた者、すなわち、人の子のほかには、だれも天に上った者はない。¹⁴そして、ちょうどモーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた、上げられなければならない。それは、彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3・13〜14)

と語っておられる。即ち、ご自分が人々の罪過(罪、咎)を背負って十字架に架かることを暗示しておられる。

また、羊と牧者との関係に見立てて語られているところ(10章)では、

「¹⁰……わたしが来たのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしは善い羊飼いである。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる。……¹⁷父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。¹⁸だれかが、わたしからそれを

取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、また、それを受ける力もある。これは、わたしの父から授かった定めである。」(ヨハネ10・10〜18)

と語っておられる。

先のヨハネ福音書3章では、イエスの言葉の後、次のように書かれてある。

「¹⁶神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは、御子を信じる者が、ひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によってこの世が救われるためである。¹⁸彼を信じる者は、裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。¹⁹その裁きというのは、光がこの世に來たのに、人々はその行いが悪いために、光よりも闇の方を愛したことである。²⁰悪を行っている者はみな、光を憎む。そして、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光に來ようとほしくない。²¹しかし、真理を行っている者は光に來る。その人の行いの、神にあつてなされたということが、明らかにされるためである」(ヨハネ3・16〜21)

さらに続けて、

「³¹上から來る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であつて、地の事を語る。天から來る者は、すべてのものの上にある。³²彼は、その見たところ、開いたところを証しているが、だれもその証しを受け入れない。³³しかし、その証しを受け入れる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである。³⁴神がお遣わしになった方は、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。³⁵父は御子を愛して、万物をその手にお与えになった。³⁶御子を信じる者は、永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命に与ることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである。」(ヨハネ3・31〜36)

イエスの受難については、旧約聖書のイザヤ書の預言に明示されている。第53章がそれである。

「³彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また、顔を覆つて忌み嫌われる者のように、彼は侮られた。われわれも、彼を尊ばなかつた。

⁴まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみを担った。然るに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

⁵しかし、彼は、われわれの咎とがのために傷つけられ、われわれの不義のために碎かれたのだ。彼は自ら懲らしめを受けて、われわれに平安を与え、その



打たれた傷によって、われわれは癒されたのだ。

6 われわれは皆、羊のように迷って、各々、自分の道に向かって行った。主(神)は、われわれすべての者の不義を彼の上に置かれた。

7 彼は、しえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。屠り場に引かれて行く子羊のように、また、毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。

8 彼は暴虐な裁きによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼は我が民の咎のために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。」(ヨハネ53・3〜8)

十字架に架かって人の(全人類の)過去・現在・未来のすべての罪(神に対する叛逆の罪)を負われ、人間を根底から救いあげた義人(神の御心に従い切った方)が、死のままで朽ち果てるなどということはあり得ない。その人は、忽然と、まばゆい霊体で現れた。これが、「復活」と言われている事態である。弟子たちは、このキリストに出会い、さらに五旬節の日に聖霊の降臨に浴して、別人とされて(新たに生れて)、この復活されたキリストを伝えることに命を惜しまなかった。使徒言行録(使徒行伝)は、その記録である。

最後の晩餐と言われている席において、イエスは弟子たちに約束された。

「¹⁸わたしは、あなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたの所に帰ってくる。¹⁹もうしばらくしたら、世は、最早、わたしを見なくなるだろう。

しかし、あなたがたは、わたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである。²⁰その日には、わたしは、わたしの父に居り、あなたがたは、わたしに居り、また、わたしが、あなたがたに居ることが、わかるであろう。²¹わたしの戒めを心に抱いてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人に私自身を顕すであろう。」(ヨハネ14・18〜21)

神・キリストが相手にして下さるのは、いわゆる「義人」(自分は正しい、神にすがったり、救いを求めたりする必要は存しない、と自認している人)ではなく、「病人」(心に傷を持っている人、神の憐れみ、救い、議りがなければ生きていけない、と自覚している人)である。

「¹²……健やかな人には医者是要らない。要るのは病人である。¹³『わたしが好きなのは憐れみであって、犠牲ではない』とはどういう意味か学んで来なさい。わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである。」(マタイ9・12〜13)

●V 新しい戒め

弟子たちとの別れに当たって主イエスが弟子たちに与えた唯一の戒めは、「互に愛し合い



なさい」であった。ヨハネ福音書の13章31〜35節、

「³¹さて、彼(イスカリオテのユダ)が出て行くと、イエスは言われた、「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった。³²彼によって栄光をお受けになったのなら、神ご自身も彼に栄光をお授けになるであろう。すぐにもお授けになるであろう。³³子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』。³⁴わたしは、新しい戒めをあなたがたに与える。互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。³⁵互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」(ヨハネ 13・31〜35)

神は見えない。信仰も外部からは見えない。愛も、それ自体は見えない。しかし、人々が互に愛し合っている姿は見える。いがみ合い、憎み合っている姿も見えるように。そして、親しい間柄の人間関係において、一緒に暮らして行く人たち、一緒に仕事をして行く人たちにおいて、長期間、互に愛し合うことは簡単なことではない。主イエスは弟子たちに、遺言として、

「互に愛し合うように。わたしがあなたがたを愛したように、その愛で、互に愛し合うように」

と言われた。何か立派な大きなことをせよとは言われなかった。けれども、そんな「愛」を人は持っているのだろうか。主イエスは弟子たちに、また次のように言われた。

「¹²わたしの戒めは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。¹³人がその友のために自分の命を捨てることもこれより大きな愛はない。¹⁴あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。¹⁵わたしはもう、あなたがたを僕しもべとは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。¹⁶あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実を結び、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。¹⁷これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである」(ヨハネ15・13〜17)

ヨハネはその手紙の中で次のように呼びかけている(第一の手紙)。



「¹⁶主は、わたしたちのために命を捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のために命を捨てるべきである。¹⁷世の富を持っていながら、兄弟が困っているのを見て、憐れみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあるうか。¹⁸子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもつて愛し合おうではないか。」(ヨハネ一3・16〜18)

「⁷愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものである。すべて愛する者は、神から生れた者であつて、神を知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛である。神はそのひとり子を世に遣わし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによってわたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。¹⁰わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さつて、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をお遣わしになった。ここに愛がある。¹¹愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さつたのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。¹²神を見た者は、まだひとりもない。もしわたしたちが互に愛し合うならば、神はわたしたちのうちにいますし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。」

¹³神が御霊をわたしたちに賜つたことによつて、わたしたちが神におり、神がわたしたちにいますことを知る。¹⁴わたしたちは、父が御子を世の救い主としてお遣わしになったのを見て、その証しをするのである。¹⁵もし人が、イエスを神の子と告白すれば、神はその人のうちにいますし、その人は神の内にいるのである。¹⁶わたしたちは、神がわたしたちに対して持つておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。¹⁷わたしたちもこの世にあつて彼のように生きているので、裁きの日に確信を持つて立つことができる。そのことによつて、愛がわたしたちに全うされているのである。」(ヨハネ一4・7〜17)

他の福音書においても、最も大切な戒めとして、「神への愛」と「人への愛」が謳われている。マルコによる福音書12章28〜31節、律法学者の「すべての戒めの中でどれが第一か」との質問に対するイエスの答え、

「²⁹……第一の戒めはこれである。『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。³⁰心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なるあなたの神を愛せよ。』³¹第二はこれである。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』これより大事な戒めは、ほかにない」(マルコ12・29〜31)



ルカによる福音書では、この二つの戒めに関して、ある律法学者が「ここにいう『隣り人』とは誰のことか」と問いかけたのに対して、次のような譬え話をされた。有名な「善きサマリヤ人の譬え話」である。

「30……ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。31するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。32同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。33ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、34近寄って来てその傷にオリブ油と葡萄酒とを注いで包帯をしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用が余計にかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。36この三人のうちだれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか。37彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行つて同じようにしなさい」。(ルカ10・30〜37)

「愛」の大切さは、結婚式でよく引用される使徒パウロのコリント前書13章の「愛の讃歌」が有名である。

「1たといわたしが、人々の言葉や御使いたちの言葉を語つても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡鉞にようはちと同じである。2たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があつても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。3たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分の体を焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、一切は無益である。

4愛は寛容であり、愛は情け深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、5不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みを抱かない。6不義を喜ばないで真理を喜ぶ。7そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。

8愛はいつまでも絶えることがない」(コリント前13・1〜8)

●VI 神の「愛」と人の「愛」——似て非なるもの

以上に見てきた「愛」は、あまりにも崇高なもので、生身の人間(生まれながらの人間の性さがを聖書は「肉」と表現する)には、およそ似合わない。人間は、本質的には皆、「自己愛」か



ら解き放たれていないからである。「人を愛する」といつても、結局は、そのことにおいて、または、そのことを通して、自己(自分自身)を愛しているのではないか。何らかの見返りを求めているのではないか。愛が報われないうち、しばしば、憎しみに変わることがある。真の「無私的愛」は人間(界)に存するのだろうか。

親の愛情を一杯に受けて育った人は、また、人に対しても愛情深い人であることはよく知られている。神に愛されていることを本当に知った人は、「愛」の人に変えられていくのではないか。「神に愛されている」ことを本当に知るには、自分は、神の愛(まずは、赦しの愛)なくしては、自らの中に、命(死んでも滅びない命、永遠の生命)も「まことの愛」も無いことを知ることが肝要だと思う。神の愛は、イエス・キリストの十字架上の死において顕れた。これが、聖書の啓示である。ヨハネ福音書やヨハネの手紙で、見た通りである。

「人は新しく生れなければ神の国を見ることも、神の国に入ることもできない」

(ニコデモとの対話)

とあるように、そして、

「肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である」

とあるように、神の「愛」と同質の「愛」の人であるためには、新しい人に創りかえられることが必要である。それは、神(キリスト)のなし給う「神の業」である。

使徒パウロは、十字架上のイエスの死において、自らも死んで、いることを体験した。ガラテヤ書2章19〜20節の告白、

「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストがわたしのうちに生きておられるのである」。

墓に葬られて四日も経つたラザロを甦らされたイエスは、ご自身が十字架上の死を経て、三日目に輝かしい霊体となって弟子たちの前に顕現した。この方は、今も天界に生きておられ、多くの人に「新生」(旧き我に死に、新しい霊の生命に生きること)を賜わっている。その生命の質は「愛」である。そして、この「愛」に根差して生きるようにと呼びかけておられる。

新約聖書の「使徒書簡」の「エペソ人への手紙」の一節に次のような祈りが記されている。

「¹⁴……わたしは膝をかがめて、¹⁵天上にあり地上にあつて『父』と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。¹⁶どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるようになり、¹⁷また、信仰によつて、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、¹⁸すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、¹⁹また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているものすべてをもつて、あなたがたが満たされるように、と祈る」(エペソ3・14〜19)



2015年5月 福音特別セミナー資料

「福音伝道における各キリスト召団の使命と各人の課題」

2015年5月30～31日(御殿場YMC A東山荘)

今回の主題「福音伝道における各キリスト召団の使命と各人の課題」に関連するこれまでの夏季福音特別集会や福音特別セミナーの資料から

2009年夏季福音特別集会(京都「くに荘」にて)「キリスト召団の使命と各人の課題」(

「霊峰だより61号」より抜粋)

第一回集会「キリストの弟子たるの道」より

「キリストの弟子たるの道」は主キリストを全生活でもって証しする道である。オール・オワ・ナッシング(全か無か)の道。キリストの言葉は無限のやさしさと同時に厳しさをもっている。良いところ取りはできない。キリスト教会には期待できないのでキリスト召団に期待している。火の玉のようであっていただきたい。主キリストを愛することはキリストの言葉を守ること、み言葉に忠実であることである。それは一人の隣人のために尽くすことであり、具体的には一人ひとりが主様との問答で示される。隣人のために祈る人は成長する。」

第二回集会「聖霊・助け主・真理の御霊」より

「神・キリストを愛するとは感情ではなく、言葉を大切にすること、尊ぶこと」、「コリント前書12章の聖霊の種々の賜物は手段であり、その目的はキリストの信、希望、愛が一人ひとりの人格、家庭、職場において実証されること」

第五回集会「キリスト召団の使命と各人の課題」より

「各自、志をもつてのキリスト召団である。小市民的生き方ではなく、一人ひとりが神の国のために愛し労すること。キリストの御国を形成し、日本から世界に貢献する。各人が燃える魂になってほしい。この二日間の48時間に燃焼していただきたい。「十字架の言葉」と「十字架につけられたイエス・キリスト」が、私たちの義、聖、贖いであり、実力ある救いの福音の土台である。キリスト者は一人ひとりがキリストの霊と一体であり、「聖霊の宮(神殿)」である。」

松井康男兄による「要約」

まず、一人ひとりが主の十字架の福音をしっかりと身につけ、キリストと一如の聖霊の宮、神殿とされることの大切さ。主キリストの愛を、集会の中で、また置かれた家庭、職場その他どこでも実際に実践すること。



召団、集会にあつては各人が一つの霊、聖霊の愛にあつて思いを一つにし、体の肢として異なつた賜物を分に応じて用い、仕え愛し合つて一つとされること。また一人ひとりにキリストの人格が化体し主の香りをただよわす器として成長させられること、それによつてキリスト・イエスが本當の救い主であることを世の人々に証し伝える使命がある。そのためには頭であるキリストとその言葉に「忠実」であり、主の愛の証しが豊かに溢れる内実のあるキリスト召団であつてほしい。

このようにキリスト召団は、使徒パウロが獄中3書簡その他で指し示したキリストの体であるエクレシヤ(教会)を、制度ではなく、霊において忠実に目指す使徒的信仰の群れである。そして個人においても集会全体においても主キリストにあつて忠実に歩み、主イエス・キリストの愛の生命を世人に証しし、神の栄光をあらわすべき偉大な使命を賜っている。

第2回 福音特別セミナー(2011年5月28～29日) 講筵資料より

第一部 福音を生きる

I 試練の中で福音を生きる

II 日本の中で福音を生きる

1、現代の日本の中で福音を生きることは並大抵ではない

- ① 科学万能の現代において
- ② 様々な宗教的慣習・習俗が根強い。
- ③ 仏教が主流である。また、「家」の宗教という観念が根強い。墓の問題もおろそかにできない。クリスチャンは孤立しがちである。
- ④ 知者は福音を愚かとする。富者、能力ある者は福音(キリスト)を必要としない。
- ⑤ 福音の厳しさ(自己否定)。日本人の宗教観は、神社・寺院に祭られている神・仏は、人間の欲望や願いを聴き届けてくれる存在であつて、人間の側に厳しい注文をしたりしない。ご利益宗教である。現世中心であり、来世に意を用いない。

III 福音の核心

1、十字架・聖霊

(1) 霊の次元・天の次元に生きる

(2) 十字架・聖霊

(3) 聖霊・助け主・真理の御霊

2、福音を生きる中心は「愛」

第二部 日本における福音の持続的展開と継承のために



I キリスト召団の存在理由は何か

強固な制度と伝統に支えられたカトリック教会、それぞれに独自の組織を有するプロテスタントの諸教会が存在する中で、キリスト召団の存在理由はどこにあるか。各キリスト召団は、信仰の「仲良しクラブ」的集まりなのか、伝道および召団(という団体)についての明確なビジョン、目標をもって祈り、学び、助け合い、支え合う「主にある兄弟姉妹の群れ」であると言えるか。

このセミナーの機会に、われわれのよって立つ基盤を再認識するとともに、その存在理由と使命を自覚したいと考える。

II 「福音」の持続的展開と継承のために

1、家庭において

2、召団の持続的展開と継承のために

(参考) 京都キリスト召団の規約から

(目的)

この団体は、広くイエス・キリストの福音を宣べ伝え、また聖書の身読を通して福音の神髄を体得し、信徒の人格及び靈性の向上に寄与することを目的とする。

(構成員の資格)

この団体は、上記の目的に賛同して構成員になることを希望するキリスト信徒及び求道者をもって構成員とする。

(事業)

上記の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 聖日(日曜日)集会の開催
- (2) 福音伝道を中心とした講演会の開催
- (3) 冊子、書籍等の出版物の刊行
- (4) その他、前各号に関連する事業

(会計)

上記の事業を行うために必要な費用は、構成員の自由な拠出金(献金)をもってまかなうこととし、拠出金の管理は会計が担当する。

会計担当者は、年一回、構成員に対して会計報告を行う。

今、わたしたちの祈りの課題の一つは、奥田が世を去った後にも、京都キリスト召団が持続的に展開を遂げ、日本における福音の証者として、継承者として、揺るぎなき歩みを続けていただくように、次代の担い手を育成することである。



第4回 福音特別セミナー(2013年6月1日～2日)「キリスト召団の使命と課題」の資料から

「日本キリスト召団の歴史的使命」(エン・クリスト第24号・1985年10月) 小池辰雄先生の講筵より。各召団の兄弟姉妹よ、各召団は夫々の特質特色を以て主の栄光を現わす身証体であつていただきたい。決して全体主義ではない。各召団の各員が誰でも天下一品です。神の作品にできそこないはない。キリスト者(クリスティアノス)は「聖霊の属^{もの}」(プネウマトス) 聖霊者でなければならぬ。それはパウロがその手紙で宣言している通りです。かくて十一召団はキリストというコンダクター(指揮者)によつて天的な交響曲を奏でます。皆使命をもつた実存です。信即行の使徒的実存! 多言は要らない。この福音を身証することあるのみ。

十一召団の人々を思うと多種多様である。要するに各人の生活の原動力が贖罪の十字架を土台とし、聖霊の御はたらきによるものであることに於いて一つである。この十字架・聖霊の一から主の栄光体现の多が生ずる。そしてこれらすべてが即ち神・キリストへの感謝であり讚美である。そういう個体の在り方の焦点が十字架・聖霊である。それゆえ個体は無者であり無限無量の質を賜った者である。まぎれもない天下一品の個でありながら、キリストの光の中の無的実存である。この個の集団が霊妙な交響曲であるという念願に生きていく。

曙の十一の星のような小さな日本キリスト召団ではあるが、以上の簡単な叙述の中にキリスト教史における我らの歴史的使命が秘められている。その使命の成否はただ創造的に身証するか否かにかかっている。垣根のないこの幕屋召団の展開をただ聖名の故に祈つてやまない。



講筵メモ

2015年5月 福音特別セミナー

2015年5月30～31日(御殿場YMCA東山荘)

●Ⅰ 集会ないし召団を成り立たせる基盤

①キリストの聖名による集まりであること

「二、三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり。」(マタイ18・20)

この御言葉は、所属如何に関わることなく、ただ、「キリストの聖名によって(聖名にあつて)集うところに、主キリスト(の御霊、御霊のキリスト)がご臨在下さるとの約束であつて、この約束が集会形成の第一の基盤(基礎)である。

②継続性・一体性を備え、かつ、存立目的・存在理由が明確であること

信仰者の随時の集まりが、即、集会ないしは召団(エクレシヤ・教会)であるわけではない。集会ないし召団は、「継続性、一体性」をもった集団であり、かつ、集団としての「存立目的」ないし「存在理由」(何のために、この集会ないし召団は存在するのか、召団存立の目的は何か)が明確であることが必要である。その集会・召団は何を目的とし、どのような目標に向かつて祈りを積み重ね、力を合わせて行くのかが明確でないと、新たにその集会・召団に入会したいと考えても、入会するのをためらうであろう。

●Ⅱ キリスト召団の形成と各召団の創設

1、キリスト召団は、小池辰雄先生の創設に始まる。

ただし、先生は、既存の教会(カトリック教会、プロテスタントの諸教会)、無教会とは異なる独自の「存在形態ないし組織」として「キリスト召団」を構想されたのではなく、独自性は、専ら「十字架・聖霊」の不可分一体性の強調、「使徒的信仰への回帰」を目的とした「新宗教改革」の実現であった。その内実が実現しておれば、組織(集団)の形態は問題ではない。ただ、個人主義の信仰ではない。十字架の土台の上に築かれた、聖霊なる靈気の充滿した三角錐体で表現される信仰共同体がキリストのエクレシヤ(召団)である。

2、小池先生は、自らが主宰する集会を「東京キリスト召団」と命名された。そして、先生が1996年、満92歳を以て天界へと帰られるまで存続した。その後は、現在の「東京キリスト召団新宿集会」へと継承されている。

3、京都キリスト召団は、奥田が1972年1月1日より、京都で新しく独立の集会をはじめたことに遡る。1973年8月の「夏季福音特別集会」(西伊豆松崎)の際に、小池先



生の了承を得て、1972年に遡って、その集会名を「京都キリスト召団」と称することとした。

4、その後、順次、幾つかの召団が創設された。その経緯については、奥田は詳しくは知らない。果たして、存立目的ないし存在理由、その使命と課題などについて、どれだけの理解と覚悟、決意があったのか、など疑問点もあるが、各召団の創設は小池先生と各召団の創設者（責任者）との間のやりとりで決まったことで、奥田は関与していない。

● III 召団（集会）の共通性

キリストの集会（召団）にとつての共通なる点は何か。これはキリスト召団に限ったことではなく、およそ、キリストの体としての「エクレシヤ（教会）」にとつての共通事項だと言えるものである。

1、キリストの体としての召団（集会） エペソ書4章4節「体は一つ、御霊は一つなり。」の「体」は「エクレシヤ」（集会・召団・教会）を指す。同4章12節の「キリストの体を建て」も同じく「エクレシヤ」を指す。信徒（聖徒）の集まりではあるが、信徒個々人を超えた独自の存在であり、「聖霊の宿り給う宮」である（コリント前書3章16～17節）。

2、召団員（集会員）は、このキリストの体なる「エクレシヤ」を構成（形成）する分子であり、彼自身がまた、「聖霊の宿り給う宮」である（コリント前書6章19節）。召団員はこのキリストの体なる「エクレシヤ」を建て上げて行く責任を負っており、そのために、日々成長していかなければならない（エペソ書3章16～21節、同4章1～7節、11～16節）。

3、召団は、聖日集会、祈り会、読書会などを通して召団員（集会員）の霊的成長に資するとともに、新会員を迎え入れて「増殖」していくことが望ましい。同じメンバーで固まってしまうと、「仲良しクラブ」的な、緊張感の薄い集まりになりかねない。次世代への福音の伝達・継承も重要な使命である。

4、召団の大切な使命は、福音の伝達者（宣教活動）であること。

そのためには、聖霊の火が熱く燃えていなければならない。集会の中に聖霊の火が熱く燃えていること、常燃の火として燃え続けていること、これが大切であるとともに、非常に難しい課題である（ヨハネ黙示録3章14～16節、参照）。

● IV キリスト召団の抱えている困難な問題

1、専従の牧師（牧会者）を有しないこと

小池先生は別として、それ以外の召団のリーダーは、皆、素人である。独学と長年の信仰生活の中で学んだこと、体験したこと、この世の職業（天職）において学び体得したことを糧として、聖書の身読と祈りの積み重ねの中で、集会を維持してきた。現在のリーダーが天に召された後の「召団の継承」はどうなるのであろうか。



2、全体として、メンバーの高齢化が進み、新しい若い世代の新規加入が乏しい。

●V 各キリスト召団の抱えている問題(課題)について

この点については、各召団(新宿集会、裾野召団)の参加者から発言して頂きたい。
奥田の眼に映った課題ないし問題点についてお尋ねさせていただくならば――

1、新宿集会について

- ①今後の歩みについて、どのようなヴィジョンをお持ちですか。
- ②毎回の集会において、小池先生のテープをお聴きになり、澤田兄の愛労になる貴重なプリントが手渡されていますが、このテープを聴いたこと、そこで学んだことが、日常生活の中で、また各自の霊的成長と福音伝道(証し)にどのように活かされていますか。
- ③聖日の意義および聖日集会の意義(存在理由、目的)をどのようにお考えですか。

2、裾野召団について

- ①「霊峰だより」を通して、松井兄の熱い祈りと福音伝道への並々ならぬ決意と祈りを受けとっています。具体的には、今後どのように展開して行こうとなさっていますか。
- ②裾野召団は目下、メンバーも少なく、地理的にも聖日ごとに集まつの集会(教会)では「聖日礼拝」と呼んでいます。を持つことが容易ではないように推察いたしますが、どのようになさっていますか。
- ③福音の次世代への継承という課題に対して、どのようなヴィジョンをお持ちですか。

以上、甚だ失礼な質問を提起したかと思いますが、ご容赦ください。また、このセミナーは東京召団新宿集会と裾野召団の合同主催によるセミナーであることから、敢えて、両召団に対してのみ、質問をする形となったことをご諒承ください。「良薬は口に苦し」の通り、今回のセミナーが両召団にとり、そして参加した京都召団および奈良召団にとっても、有意義なものであることを心より念願しています。



キリスト道講演会 レジュメ

2015年7月 詩篇および新約聖書と「祈り」

2015年7月12日（東京新宿）

● I 詩篇と「祈り」

【解説】『聖書辞典』（新教出版社、1968年）より

詩篇は、

- 第1巻 || 1 ~ 41篇、
- 第2巻 || 42 ~ 72篇、
- 第3巻 || 73 ~ 89篇、
- 第4巻 || 90 ~ 106篇、
- 第5巻 || 107 ~ 150篇

で、各巻の終りの詩の末尾に、「イスラエルの神、主は、とこしえからとこしえまでほむべきかな。アアメン、アアメン」という頌栄を付加しており、第1篇は全詩篇の序として、第150篇は結びの詩としての役割を果たしている。この構造は後代の編集者により5巻にまとめられたもので、それ以前には、幾つかの詩集にまとめられていたと推測される。それは、ダビデの歌、コラの子の歌、アサフの歌、都もうでの歌、というような表題や、幾つかの詩が「主をほめたたえよ」（ハレルヤ）という言葉で始まっていることから、ダビデ集、コラ集、アサフ集、巡礼歌集、ハレルヤ集、という詩集の存在したことが知られる。「ダビデの歌」というのは、ダビデが作者であることを意味するのではなく、ダビデの名を冠した詩集の意味であるとされている。

150の詩篇を分類すると、

- 〈讚美の歌〉 (8、19、46等)、
- 〈嘆きの歌〉 (7、22、44、137等)、
- 〈感謝の歌〉 (30、41、116、124等)、
- 〈王に関する歌〉 (2、45、101、110等)、
- 〈信頼の歌〉 (23、62等)、
- 〈知恵文学的な詩〉 (1、37、127、128等)、
- 〈主の即位の歌〉 (93、97、99等) など。

詩篇は後になって、捕囚後のエルサレム神殿での礼拝用に編集され歌われた。それは、「聖歌隊の指揮者によって」という表題の多いことや、「琴にあわせて」（4、54、67等）、「……のしらべにあわせて」（9、45、53、57、60等）という指示によって明らかである。



詩篇はその作られた年代の幅も広く、作者も多く、思想も実に豊かである。それらはすべて神を信ずる者たちの、その時々的心から溢れ出た信仰の歌であつて、読者に深い感銘を与えるものである。それゆえキリスト教会においても、古くから詩篇は尊重され、親しまれている。(219〜220頁)

エホバ。旧約の神の名ヤハウエを誤って読んだ呼び名。ユダヤ人は神の名をみだりに唱えてはならないという戒めを固く守つて、神の名を呼ぶ代わりに、主(アドナイ)と呼んでいたが、後代になつて、ヤハウエを表す子音とアドナイの母音とが混同されて、エホバという発音が生じてしまった。多くの現代語訳聖書で「エホバ」が採用されたが、最近では〈主〉と訳すことが多い。(83頁)

(文語訳聖書では「エホバ」、口語訳聖書や新共同訳聖書では「主」と表記されている。)

私(奥田)の感想としては、詩篇の「祈り」(祈願)には、仇、敵、自分を責め迫害する者の攻撃から「この身を護つて下さい。防いで下さい。」との祈願や、さらには、このような仇、敵、自分を責める者を懲らしめて下さい、と祈るものが多いように思われる。そして、自分の側には、そのような攻撃を受ける理由はないとか、自分は神の前に正しい(義である)のだから、と主張しているものも散見される。裏を返せば、もし自分が義でなければ、もし自分の側に非難に値する事情(相手に対し、あるいは、神に対し)があるのなら、仇や敵の攻めは、神からの裁き(審判)であつて、甘受するか、それにもかかわらず「神の憐れみ、赦し」のゆえに、なお、「助けたまえ」との呻き、祈りが発せられている。

以下に、幾つかの詩篇を取り上げてみよう。(文語の場合も「主」を用いる)

第3篇(朝の祈り)

① 1 主よ、我に仇する者のいかにはびこれるや、我に逆らいて起こり立つ者多し。2 わが魂をあげつらいて、かれは神に救われること無しと言う者ぞ多き。

② 3 されど主よ、汝は我を囲める盾、わが榮、わが首をもたげたもう者なり。4 われ声をあげて主に呼ばわれば、その聖山より我に応えたもう。5 われ臥していね、また目さめたり、主われを支えたまえばなり。6 われを囲みて立ち構えたる、千万の人をも我は恐れじ。

③ 7 主よ、願わくは起き給え、わが神よ、我を救い給え、なんじ先にわがすべての仇の頬骨を打ち、悪しき者の齒を折りたまえり。

④ 8 救いは主にあり、願わくはみ恵み、汝の民の上に在らんことを。

上記の①③④は主への呼びかけ、祈願。②は主に対する信頼と感謝の告白。

第4篇(夕の祈り)

① 1 わが義を護り給う神よ、願わくは我が呼ばわるときに答え給え、わが艱難たる時なんじ我を寛がせ給えり、願わくは我をあわれみ、わが祈りを聴



き給え。

② 2 人の子よ、汝らわが榮を恥しめて幾その時を歴んとするか。汝らむなしき事を好み虚偽を慕いて幾その時を歴んとするか。3 されど汝ら知れ、主は神を敬う人を分かちて己に属かしめ給いしことを、われ主に呼ばわらば聴き給わん。

③ 4 汝ら慎み慄きて罪を犯すなかれ、臥床にて己が心に語りて黙せ。5 汝ら義の供え物を献げて、主に依り頼め。

④ 6 多くの人言う、誰か嘉き事を我らに見する者あらんやと。主よ、願わくは聖顔の光を我らの上にのぼらせ給え。7 汝のわが心に与え給いし歡喜は、彼らの穀物と酒との豊かなる時にまさりき。8 われ安らかにして臥しまたねむらん、主よ、我を独りにて平らかにおらしむる者は汝なり。(詩篇4・1) 9)

①と④は祈り、神への呼びかけと語らい。②は自分を攻める(責める)者への反論。③は、人への(民への)呼びかけであると同時に、自らへの呼びかけでもある。

このように、祈り(祈願)のスタート(起点)は、自己を攻める者(仇)の攻撃、その危機の中からの「護り」への祈りであるが、その祈りは、神との「対話」でもある。

「わが義を護り給う神よ」(口語訳では、「わたしの義を助け守られる神よ」)は、『口語 旧約聖書略解』(日本基督教団出版部、1957年)の解説によれば、原典には「わたしの義の神よ」と記されているが、その意味は「わたしの義の基なる神よ」か、口語訳のように解すべきである、としている(530頁)。

第5篇 (朝礼拝の祈り)

この詩篇の内容は、全篇が主への祈りであり、祈りの中での主(神)への語りかけである。語りかけに対する神の側からの応答は含まれていないが、心の中の思いを吐露すること、貴神はこのようなお方なのだから、きつとこうして下さるに違いありませんとの信頼の告白もまた、祈りの大切な要素ではなからうか。

新約聖書のピリピ書4章に、

「5……主は近し。6 何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。7 さらば凡て人の思いにすぐる神の平安は、汝らの心と思いをキリスト・イエスによりて守らん。」(ピリピ4・5〜7)

とあるのが、現在の私たちに對する実践的な奨めであると言える。

以下に、第5篇の内容を「祈り(祈願)」の部分と、「神に對する語りかけ」の部分に分けながら辿ってみよう。

① 1 主よ、願わくはわが言に耳を傾け、わが思いに御心を注め給え。2 わが



王よ、わが神よ、わが号呼の声を聴き給え、われ汝に祈ればなり。

② 3 主よ、朝に汝わが声を聴き給わん、われ朝に汝の為に備えて待ち望むべし。4 汝は悪しき事を喜び給う神にあらず、悪しき人は汝の賓客たるを得ざるなり。5 高ぶる者は汝の目前に立つを得ず、汝はすべて邪曲を行う者を憎み給う。6 汝は虚偽を言う者を滅ぼし給う、血を流す者と詭計をなす者とは主憎み給うなり。7 されど我は豊かなる仁慈によりて汝の家に入らん、われ汝を畏れつつ聖宮に向かいて拜まん。

③ 8 主よ、願わくは我が仇のゆえに汝の義をもて我を導き、汝の途をわが前に直くしたまえ。9 彼らの口には真実なく、その衷はよこしま、その喉はあばける墓、その舌はへつらいを言えばなり。10 神よ、願わくは彼らを刑ない、その謀略によりて自ら仆れしめ、その咎の多きによりて之を逐い出し給え、彼らは汝に反きたればなり。11 されど凡て汝に依り頼む者を喜ばせ給え、汝かかる人を護り給うなり。聖名をいつくしむ者にも汝によりて歡喜を得しめたまえ。

④ 12 主よ、汝は義しき者にさいわいし、盾のごとく恩恵をもて之を囲み給わん。(詩篇5・1〜12)

この詩篇の①③は祈り(祈願)、②④は、神に対する語りかけ、と見ることがができる。そして、祈り(祈願)と語りかけ(信頼の告白)とは不可分の関係にあると言ってよい。

祈りとは、そういうものなのだと思います。

このような一体のものとして、次の第6篇を味わってみよう。

第6篇 (懺悔の詩篇)

「1 主よ、願わくは憤りをもて我を責め、烈しき怒りをもて我を懲らしめ給うなかれ。2 主よ、我を憐れみ給え、われ萎み衰うるなり。主よ、我を癒したまえ、わが骨わななきふるう。3 わが靈魂さえも甚くふるいわなく、主よ、かくて幾その時を歴給うや。4 主よ、帰り給え、わが靈魂を救い給え、汝の仁慈の故をもて我を助けたまえ。5 そは、死にありては汝を思い出づることなし、陰府にありては誰か汝に感謝せん。6 われ歎息にて疲れたり、われ夜な夜な床をただよわせ、涙をもてわが衾を浸せり。7 わが目うれえによりて衰え、もろもろの仇ゆえに老いぬ。8 なんじら邪曲を行う者、ことごとく我を離れよ、主はわが泣く声を聴き給いたり。9 主わが懇求を聴き給えり、主わが祈りを受けたまわん。10 わがもろもろの仇は恥じて大いに怖じ惑い、あわただしく恥じて退きぬ。」(詩篇6・1〜10)

この詩篇の心は、仇(敵)に激しく攻められ、窮地に陥っているにもかかわらず、一向に神からの助けも応答も得られない、そんな状況が長く続く。この状況は、神の激しい審判



が自分の上に臨んでいるからにほかならない。それが長く続くことよって、身も心も疲れ果て、死をも覚悟せねばならぬ苦境に在る。もう限界だとの悲痛な魂の叫びが発せられている。「汝の仁慈の故をもて」我を助けたまえと祈る。自分が正しいから助けを獲得する資格がある、というのではない。ただ、神の慈しみ、一方的な憐れみだけに依りすぎるほかなし、との思いが吐露されている。その点では、新約における「祈り」に通ずるものがある。

第7篇 (義なる神への訴え)

この詩篇も、

「¹わが神、主よ、われ汝に依り頼む、願わくは、すべての逐い迫る者より我を救い、我を助け給え。²恐らくは、かれ獅の如く我が^{たましひ}をかき破り、

^{たす}援くる者なき間に裂きてずたずたに^せ為ん。」(詩篇7・1〜2)

新共同訳では、

「¹わたしの神、主よ、あなたを避けどころとします。わたしを助け、迫る者から救ってください。²獅子のようにわたしの魂を餌食とする者からだれも奪い返し、助けてくれないのです。」(詩篇7・2〜3)

と窮地に陥った中からの祈願で始まっている。そして、続く3〜5節(文語訳、口語訳。新共同訳では4〜6節)では、自分の側に、忘恩、裏切り、略奪などの「非」があるのなら、どんなひどい目に遭わされても仕方がない、当然だけれども、そうでないなら(いや、そうでないのです。自分は正しいのです)、敵に対して怒りをもつて立ち上がり、わたしに味方して、裁きをして、「お前は正しい」と宣言して下さい、と神に訴えている。ただし、上記の3〜5節(新共同訳では4〜6節)は、以下に見るように訳し方が様々で、難しい。

「³わが神、主よ、もし我この事をなししならんには、わが手に^{よこしま}邪曲の纏りおらんには、⁴故なく仇する者をさえ助けしに、^{わざわい}禍害をもてわが友に報いしならんには、⁵よし仇人わが^{たましひ}靈魂を逐いとらえ、わが^{いのち}生命を土に踏みにじり、わが榮を塵におくともその為すに任せよ。」

「³わが神、主よ、もしわたしがこの事を行ったならば、もしわたしの手によこしまな事があるならば、⁴もしわたしの友に悪をもつて報いたことがあり。ゆえなく、敵のものを略奪したことがあるならば、⁵敵にわたしを追い捕えさせ、わたしの命を地に踏みにじらせ、わたしの魂をちりにゆだねさせてください。」(口語訳)

「⁴わたしの神、主よ、もしわたしがこのようなことをしたのなら わたしの手に不正があり、⁵仲間^に災いをこうむらせ、敵をいたずらに見逃したなら、⁶敵がわたしの魂に追い迫り、追いつき、わたしの命を地に踏みにじり、わたしの誉れを塵に伏させても当然です。」(新共同訳 詩篇7・4〜6)



以上は、詩篇の最初の、それもごく一部を取り上げたにすぎない。

詩篇の内容は【解説】に述べられているように、実に豊かなものであるから、最初の数篇からの先入観で判断するのではなく、全体を通覧するように努めていただきたい。

「祈り」とはかかわりなく、素晴らしい内容の詩篇は、例えば、

第23篇 (主はわが牧者)、

第27篇 (主はわが光、わが救い)、

第46篇 (神はわれらの避所)、

第62篇 (黙してただ神を待つ)、

第91篇 (御翼の蔭)、

第103篇 (旧約の福音)、

第119篇 (イロハ歌)、

第130篇 (深き淵より)、

第139篇 (汝、知り給う)

などを挙げる事ができる。

その中で、「祈り」との関係で注目したいのは、第130篇である。

「ああ主よ、我ふかき淵より汝を呼べり。主よ、願わくはわが声を聴き、
 汝の耳を我が懇求の声に傾け給え。ヤハよ、主よ、なんじ若しもろもろの
 不義に目をとめたまはば、誰かよく立つことを得んや。されど汝に赦しあ
 れば、人におそれ畏まれ給うべし。われ主を待ち望む、わが靈魂はまちの
 ぞむ、我はその聖言によりて望をいだく。わが靈魂は衛士があしたを待つ
 にまさり、誠に衛士が目を待つにまさりて主をまつ。イスラエルよ、主
 によりて望をいだけ、そは主に憐憫あり、またゆたかなる救贖あり。主は
 イスラエルをそのもろもろの邪曲より贖い給わん。」(詩篇130・1〜8)

第103篇にも、

「主は汝がすべての不義をゆるし、汝のすべての疾病を癒し、汝の生命
 を滅亡より贖い出し、仁慈と憐憫とを汝に冠らせ、汝の口を嘉物にて飽か
 しめ給う、かくて汝は壮やぎて鷺のごとく新になるなり。主は憐れみ
 と恵みにみちて、仁慈ゆたかにまします。主の憐憫は永遠より永遠
 まで主を畏るる者にいたり、その公義は子孫のまた子孫に至らん。」(詩篇
 103・3〜17)

と、神(主)の一方的な愛と憐れみによる赦しと救い(贖い)が高らかに謳われている。

この第130篇や第103篇は、新約聖書の世界に通ずるものである。



● II 新約聖書と「祈り」

新約聖書においては、私たちの祈りの土台は、主イエス・キリストが十字架上の死において、私たちの不義（ローマ書1章〜7章に詳述されているとおり、神に対する叛逆、自己主張、御意に従い得ない根源的罪性Ⅱ肉のすがた）を自らのものとして背負って下さり、完全な贖罪を成し遂げて、「無罪・無私」を賜り、同時に「聖霊（御霊）」を賜って「神の子」の実質を与えて下さったこと（同8章）にある。ガラテヤ書2章20節、

「20我キリストと偕ともに十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。」（ガラテヤ2・20）

との使徒パウロの告白のとおりである。パウロはまた、テモテ前書において、

「14我らの主の恩恵めぐみは、キリスト・イエスに由れる信仰および愛とともに溢るばかり弥増いやませり。15『キリスト・イエス罪人を救わん為に世に來り給えり』とは、信まことずべく正しく受くべき言なり、其の罪人つみびとの中にて我は首かしらなり。16然るに我が憐憫あわれみを蒙りしは、キリスト・イエス我を首かしらに寛容をことごとく顯し、この後、彼を信じて永遠の生命を受けんとする者の模範となし給わん為なり。」（テモテ前1・14〜16）

と語っている。

このように、私たちが神・キリストの御前に立ち得るのは、私たち自身の「義」（神の前の正しさ）の故ではなく、ひとえに、主キリストの贖罪愛による。我々自身の側に根拠はない。そして、私たちは何をどう祈ってよいか分からない時でも、

「26御霊も我らの弱きを助け給う。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き呻きをもて執り成し給う。27また人の心を極め給う者は御霊おんいの念おもいをも知り給う。御霊は神の御意みこころに適かないて聖徒のために執り成し給えばなり。」（ロマ8・26〜27）

との約束に支えられて、大胆に祈ることができるのである。

ヨハネ伝福音書において、主は

「7汝ら我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に隨いて求めよ、さらば成らん。8汝ら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし。而して汝等わが弟子とならん。」（ヨハネ15・7〜8）

と語っておられる。使徒書簡では、

「11……心を熱くし、主につかえ、12望みて喜び、患難なやみに耐え、祈りを恒にし、」（ロマ12・11〜12）

とか、



「¹⁶常に喜べ、¹⁷絶えず祈れ、¹⁸凡てのこと感謝せよ、これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給う所なり。」(テサロニケ前5・16〜18)

また、

「^{よろず}万の物の終り近づけり、されば汝ら心を確かにし、慎みて祈りせよ。」(ペテロ前4・7)

と祈りの大切さが説かれている。ヤコブ書では、

「¹³汝らのうち苦しむ者あるか、その人、祈りせよ。喜ぶ者あるか、その人、讚美せよ。¹⁴汝等のうち病める者あるか、その人、教会の長老たちを招け。彼らは主の名により其の人に油をぬりて祈るべし。¹⁵さらば信仰の祈りは病める者を救わん、主かれを起し給わん、もし罪を犯しし事あらば赦されん。¹⁶この故に互に罪を言い表し、かつ癒されんために相互に^{あいたがい}祈れ。正しき人の祈りは働きて大いなる力あり。」(ヤコブ5・13〜16)

と奨めている。ピリピ書では、

「⁵……主は近し。⁶何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝して汝等の求めを神に告げよ。⁷さらば凡て人の思いにすぐる神の平安は、汝等の心と思いとをキリスト・イエスによりて守らん。」(ピリピ4・5〜7)

最後にヨハネ第一書から。

「¹⁴我らが神に向かいて確信する所は是なり、即ち御意にかなう事を求めば、必ず聴き給う。¹⁵かく求むるところ、何事にても聴き給うと知れば、求めし願いを得たる事をも知るなり。」(ヨハネ1・5・14〜15)

マタイ、マルコ、ルカの福音書において、主イエスが「祈り」のことを教えて下さっているところは、各自で探し出していきたい。



ご案内

2015年7月 夏季福音特別集会(京都)のご案内

2015年7月5日(京都)

昨年の充実した夏季福音特別集会から1年が経とうとしています。昨年は、「聖霊に在る(ゆる)・信望愛の実践」を主題といたしました。その趣旨は、一人ひとりが、聖霊(御霊のキリスト、キリストの御霊)を内に宿して、日々の生活の中で(個人として、家庭の人として、居住地の隣人として、職場などの社会生活において)様々の問題や課題に直面しつつ、主キリストの賜う「信望愛」に支えられ、貫かれて生きる生き方を体得するためでした。そのためには、日々、聖書(主として新約聖書)の「みことば」に触れ、これを日々の食物として消化・吸収していなければなりません。「みことば」に触れる時に「祈り」が湧きます。「祈り」の中でわが身を十字架の主キリストに委ねます(全托します)。私たち一人ひとりを、「世」から救い出し、選び出して下さった主キリストは、私たちが福音の使徒として、またキリストの証し人として、日々の生活のただ中で「キリストの賜う信望愛の実践者であること」を願っております。

このような生き方を力強く貫く上で無くてならないものは、日々の「祈り」です。それでいて、私たちは、時として、どのように祈ればよいのか、どうすれば本当の「祈り」を体得することができるのか、悩むことが少なくありません。そこで、本年の特別集会の主題を、「祈り」とし、「旧約・新約両聖書と『祈り』」としました。

そこで、私からのお願いがあります。特別集会のための準備として、参加者各自が次の課題に取り組んでください。

【課題】

I 旧約聖書に登場する人たちが、どんな場面でどんな祈りを捧げてきたか、それに対して神はどのように応えてこられたか。具体的には以下の箇所を参照されたい。

アブラハムの老僕の祈り… 創世記24章

ヤコブの祈り… 同28章20節、32章10節

モーセの祈り… 出エジプト記33章12〜23節、申命記3章23〜28節

ハンナの祈り… サムエル記上1〜10節

ダビデの祈り… サムエル記下7章18〜29節

ソロモンの願い… 列王記上3章4〜15節、歴代誌下1章7〜12節

ソロモンの祈り… 列王記上8章22〜61節、

主の応答… 同9章1〜9節、歴代誌下6章14〜42節、7章1〜3節、



- 11～22節
- エリヤの祈り… 歴代誌下17章17～24節、18章20～40節、19章1～18節
- エリシヤの願い… 列王記下2章1～14節
- エリシヤの祈り… 同4章8～37節
- ヒゼキヤ王の祈り… 同19章(14～19節)、20章1～7節、歴代誌下32章(20～23節)、24～26節、イザヤ書36章～37章、38章
- 第三イザヤ書における祈り… 63章15～19節、64章
- エレミヤの祈り… エレミヤ書14章11～22節、15章10～21節、17章5～18節、20章7～18節、32章16～25節、26～44節
- 主の応答…
- ダニエルの祈りと神の護り…ダニエル書6章(11節、23節)、9章
- ヨナの祈り… ヨナ書2章、3章～4章
- ハバククの祈り… ハバクク書1章、3章

詩篇： 詩篇は全体が祈りであり、同時に神讚美の詩である。その中から、「エホバよ」とか、「神よ」との呼びかけで始まっているものを拾い上げよう。

- 第3篇、第4策、第5篇、第6篇、第7篇、第8篇、第9篇(10、13、19、20節)、第10篇、第12篇、第13篇、第15篇、第16篇、第17篇、第18篇、第19篇(12～14節)、第21篇、第22篇、第25篇、第26篇、第27篇(7～11節)、第28篇、第30篇、第31篇、第33篇(22節)、第35篇、第36篇(5～11節)、第38篇、第39篇、第40篇、第41篇、第42篇、第43篇、第45篇、第48篇(9～10節)、第51篇、第54篇、第55篇、第56篇、第57篇、第59篇、第60筋、第61篇、第63篇、第64篇、第65篇、第67篇～第72篇、第74篇～第77篇、第79篇、第80篇、第83篇～第86篇、第88篇～第89篇、第90篇、第92篇～第94篇、第101篇、第102篇、第104篇、第108篇、第109篇、第115篇、第116篇、第119篇、第120篇、第123篇、第125篇、第126篇、第130篇～第132篇、第138篇、第139篇～第143篇、第145篇。

II 新約聖書マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4福音書から、「祈り」にかかわる箇所を各自で拾い上げて下さい。次いで、使徒行伝(使徒言行録)における「祈り」にかかわる箇所。使徒書簡では、

ロマ書、コリント前・後書、エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、テサロニケ前・後書、ヤコブ書5章13～18節、ペテロ前書4章、ヨハネ第一書5章13～15節。

以上、大変骨の折れる作業ですが、特別集会への準備として、今から取り掛かっていたければ幸いです。



キリスト道講演会レジュメ

2015年10月 「見えるもの」と「見えないもの」

——真に永続するものを求めて——

2015年10月25日

要旨 私達は日常生活において、「見えるもの」に心を奪われがちですが、「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」との聖書の言葉を大切にして、どんなときにも「神様のご配慮と導き」に委ねて歩みたいと願います。

聖書の言葉（コリント人への第二の手紙第4章16節～18節）

（文語訳）

「¹⁶この故に我らは落胆せず、我らが外なる人は壊るれども、内なる人は日々^{あらた}に新なり。¹⁷それ我らが受くる暫くの^{かろ}軽き患難は、極めて大なる^{とこしえ}永遠の重き^{おおい}栄を得しむるなり。¹⁸我らの顧みる所は見ゆるものにあらず見えぬものなればなり。見ゆるものは^{しばらく}暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。」（コリント後4・16～18）

（口語訳）

「¹⁶だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。¹⁷なぜなら、このしばらくの^{かろ}軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。¹⁸わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。」（コリント二4・16～18）

「見えるもの」と「見えないもの」のコントラスト

「見えるもの」:

人、物、人の言葉、態度、出来事、自然現象など、人の知覚で認識できるもの。

「見えないもの」:

① 「見えるもの」の奥に隠れている（あるいは隠されている）「本質」、「真実」、「不真実」

② 将来の出来事、将来現れてくるであろう事態（人の生涯において生起する事態や聖書における預言の成就、世の終末、新天地）

③ イエスが言われた「徴」:

例えば、ヨハネ福音書6章におけるパンの奇跡の御業で顕された本質的な事柄、すなわち、イエスは永遠の命であること、イエスを信じる者には永遠の命が与え



られるということ（人々はパンに目を奪われて、その御業をもって何を示そうとなさったのかを悟ることができなかった。）

イエスが預言者イザヤの預言を引用されて、

「それは彼らが見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らない」

（文語訳…これ彼らは見ゆれども見ず、聞ゆれども聴かず、また悟らぬ故なり）

と嘆かれたのも同様である。

わたしたちの人生、そして日常生活は、様々の不安定要因に取り囲まれている。大げさに言えば、「明日、何が起こるか分からない」。他人に起こった不慮の不幸な出来事が、「明日は我が身」かもしれない。今日一日を生きるのに精いっぱいなのに、明日のこと、先々のことを考えれば、不安・心配は増すばかりである。誠実な人、真面目な人、責任感の強い人ほど不安と重荷を背負い込みがちである。このような人間の現実に対して、イエスは

「明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一

日にて足れり」（マタイ6・34）

と諭された。また、

「凡て労する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません」（マタイ

11・28）

と慰めの言葉を与えておられる。

ヒルティは『眠られぬ夜のために』の中で次のように語っている。

「見えない世界を「信じる」ことによって歩くか、それとも日常の世界を「見る」こと」によって歩くかにしたがって（コリント人への第二の手紙5章7節…「見ゆる所」によらず、信仰によりて歩めばなり。）、人生は非常にちがった相貌を呈することになる。われわれは同一の外的状況の下で、絶望することもあれば、また実に平安に、それどころか幸福でいることもできる。

信仰によって進む場合、それにいくらか「想像」があずかることもあろう。しかし、目に見える事物は、本当に、それが見えているとおりのものであるだろうか。いわゆる「現実の」世界に關しても、われわれは、実は全くの謎と仮定の前に立っているのではなからうか。（2月15日）

「われわれが完全に神の導きに身をまかせらば、生活を主として苦渋にし、しかも不断の心労をもってしてもどうにもならない多くの事柄に対して、高貴な無関心を会得することができよう。しかしこの「軽やかな心」を得るには、神をかたく信じ、その命令に必ず従うことが前提である。」（1月5日）

ペテロ前書1章8節には、

「汝らイエスを見しことなけれど之を愛し、今見ざれども之を信じて、言いがたく、かつ光榮ある喜悅よろこびをもて喜ぶ。」（ペテロ前1・8）



とある。

このように、「見えるもの」ではなく、「見えないもの」に目を注ぐということは、信ずること（信仰）と深いかわりがあることがわかる。そして、神は人間がそのような「見えないもの」を見つめて（ということとは「信じて」）歩むこと、生きることが望んでおられることがわかる。ヘブル書11章1節に、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」（ヘブル11・1）

と記され、それに続けて、このような信仰の道を歩んだ人たちのことが列挙されている。

コリント前書13章には、

「愛は、……凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。⁸愛は長久までも絶ゆることなし。……¹³げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。」（コリント前13・7〜13）

とあるが、ここに挙げられている「信仰」「希望」「愛」も、「見えないもの」に目を注いで生きることであり、その大切さを教えている。

神御自身は「見えない」。しかし、われわれのために主イエスを遣わして下さった。「見える」イエスにおいて、「見えない」神を見る者は幸いなりと、

「我を見し者は父（神）を見しなり」（ヨハネ14・9）

とある通り。

また、イエスは何のために地上に来て下さったのか、その目的（神の御計画・御意）を理解できた者はいなかった。弟子たちも洞察することができなかった。

イエスの十字架上の死と復活（輝く霊体としての顕現）に関しても同様である。その事態（現象）において何を見るか。

イエスが十字架にかけられ、十字架上で死を遂げられたことはその場に居合わせた人々がすべて肉眼で見た事実・事態であった。しかし、そこに秘められた見えない事柄（真の事態）は神の啓示（キリスト御自身による、あるいは聖霊による）によつて初めて明らかにされる事柄（事態）なのである。

凡そ聖書が伝えようとしている真の内実、天国の事態、「霊」に関わる事柄は、生身の人間が自ずと理解できるようなものではない。パリサイ派の知者ニコデモとイエスの問答のなかで明らかである。

「人新たに生まれずば神の国を見ること能わず。神の国に入ること能わず」（ヨ

ハネ3・4）

とイエスが語っておられる通りである。

地上に生きる私たちの姿（肉体を備えた自然のままの私たち）は「見えるもの」であり、五感で知ることのできるもの、肉体だけではなく、心や精神の状態も科学や医学の目で確か



めることができるという点で、「見えるもの」である。そして、誰にでも終末(死)が訪れ、人は土に帰る。それだけを見れば、儚い存在であり、「死」はすべての終りであり、人生は「空の空なるかな」の嘆きを伴う。

しかし、神は御子イエスによって、死んでも死なない命(永遠の生命)を信ずる者にお与え下さった。この命は「見えない」。しかし、復活されたキリスト(輝く霊体となって顕現してくださったキリスト)は、最早、「見える肉体」の存在ではなく、「見えない、しかし、生きて在り給う永遠の霊的実在者キリスト」なのである。そして、信ずる者に同じ栄光の姿を与えると約束して下さっている。ここに私たちの希望がある。

コロサイ書3章3〜4節に、

「³……(汝らの)生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。⁴我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」

(コロサイ3:3〜4)

とある。

旧き人間(生まれながらの人間の相)とキリストによって新しい誕生をいただいた「新しき人」との対比を霊的(見えない)次元において明らかにしているロマ書8章の全体が「見えない神」とその深い「愛」の勝利の高らかな宣言なのである。

福音書も使徒書簡も、いや、新約聖書の全体が、「見えるもの、見える現実」に捉われることなく、その奥に隠されてある「見えない、神・キリストの無限の愛(恵み)」を私たちが全存在的に体受して生き生きと生きるようにとの励ましと祝福に満ちているのである。これを宣言しているのが、エペソ書3章16〜19節である。すなわち、

「¹⁶父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、¹⁷信仰によりてキリストを汝らの心に住ませ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、¹⁸凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何ばかりなるかを悟り、¹⁹その測り知るべからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満しめ給わん事を。」(エペソ3:16〜19)

(口語訳)

「¹⁶どうか父が、その栄光の富にしたがいて、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるよう、¹⁷また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、¹⁸すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているものすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る。」

(エペソ3:16〜19)



2015年11月 「まず神の国と神の義を」(マタイ福音書より)

2015年11月8日(京都)

4章4節 サタンの誘惑にたいするイエスの応答

Human beings cannot live on bread alone, but need every word that God speaks.

人はパンだけで生きることが出来ないのだ、どうしても神の語り給う一つの言葉が必要なのだ。

4章7節 同上

Do not put the Lord your God to the test.

貴方の主である神様にテストを受けさせるようなことをしてはならない。

4章10節 同上

Worship the Lord your God and serve only him!

貴方の主なる神を拝し、ただ彼(主なる神)にのみ仕えよ!

5章6節 共同訳 「義に飢え渴く人々は幸いである」

Happy are those whose greatest desire is to do what God requires.

その人の最大の欲求が神の求め給うところを行う(為す)事に在る人は幸いである。

5章10節 「義のために迫害される人々は幸いである」

Happy are those who are persecuted because they do what God requires.

神の求め給うところを行うが故に迫害されている人々は幸いである。

(迫害を受けている理由が神の求め給うところを行っていることにある人々は幸いである)

これらにおいて、「義」を客観的な正しさとか正義ということではなく、神の求め給うところ(求め給うこと)を行うこと、と解している点が特徴的である。

5章13節 「あなたがたは地の塩である。」

You are like salt for the whole human race.

あなたがたは全人類のための塩のようなものである。

5章14節 「あなたがたは世の光である。」

You are like light for the whole world.



あなたがたは全世界のための光のようなものである。

(全世界にとっての光、全世界を照らす光)

6章3節「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない」

But when you help a needy person, do it in such a way that even your closest friend will not know about it.

しかしあなたが、助けを必要としている人を助けるときには、あなたの最も親しい友人でさえそれを知らないようなやりかたでしなさい。

6章31、33、34節

「³¹だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。

³³何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。

³⁴だから、明日のことを思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

“So do not start worrying: ‘Where will my food come from? or my drink? or my clothes?’”

Instead, be concerned above everything else with the Kingdom of God and with what he requires of you, and he will provide you with all these other things.

So do not worry about tomorrow, it will have enough worries of its own.

There is no need to add to the troubles each day brings.

わたしの食べ物はいったいどこから来る(誰が世話してくれる)のだろうか、とか、飲み物は? 着るものは? などと思いつくことから(一日を)スタートするのではなく、そうではなくて、何にもまして、まず神の王国と神があなたに何を求めておられるのかを関心事としなさい。そうすれば、神はこれらすべてのものを用意して下さるから。

だから、明日のことを思い煩うな、明日はまた明日で十分に思い煩うべきことがあるのだから。毎日毎日トラブル(厄介なこと)があるのだから、それに対応するだけで十分だ(と)り越し苦勞することは愚かだ)。

